

プレスリリース



開館三十五周年記念特別展

鍋島焼

—二百年の軌跡—

2022年4月1日（金）～7月18日（月・祝）

2022年、戸栗美術館は開館35周年を迎えます。開館以来、陶磁器専門美術館として所蔵品によって展覧会を企画してまいりました。当館の所蔵品のうち、大きな一画を占めているのが鍋島焼です。精巧に作られた磁器であり、当館創設者戸栗亨が好んで蒐集したやきもののひとつです。

鍋島焼は、江戸時代に肥前国佐賀地方を治めた佐賀鍋島藩より徳川将軍家への献上、あるいは幕閣や公家、大名家などへの贈答品として用いられました。領内の有田では17世紀初頭に日本初となる国産磁器である伊万里焼の焼造がはじまっており、それを基に、17世紀後半には鍋島焼が誕生。伊万里・大川内山に鍋島藩窯が築かれ、17世紀末期には盛期を迎えるました。しかし、18世紀前期以降は儉約令のあおりを受けて色絵はあまり作られなくなります。18世紀後期には將軍からの要望により新たな器形やモチーフが登場するなど変化を見せますが、19世紀後半、鍋島藩窯は歴史に幕を下ろしました。

今展では、江戸時代の約200年間に及ぶ鍋島焼の歩みを、盛期を中心に、成形や装飾の技法、技術に注目してご紹介いたします。佐賀鍋島藩が威信をかけて製作した鍋島焼、約80点をご堪能ください。

展覧会紹介文

どうぞご活用ください。

■ 23word

成形や装飾の技法・技術に注目して約80点を紹介。

■ 97word

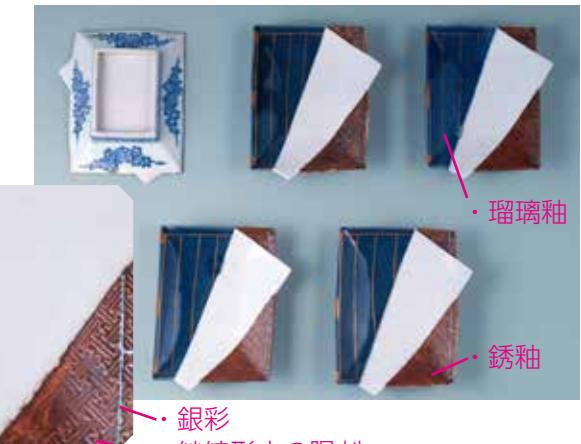
鍋島焼とは、江戸時代に佐賀鍋島藩より徳川将軍家への献上、あるいは幕閣や公家、大名家などへの贈答品として用いられた精巧な磁器。盛期作品を中心に、成形や装飾の技法、技術に注目して約80点を展覧する。

主な出展作品

①瑠璃銹釉染付金銀彩 草子形皿

鍋島 江戸時代（17世紀後半）口径 13.5×11.2cm

大川内鍋島藩窯以前の鍋島焼の窯と目されている日峯社下窯跡から、同形の白磁片が出土している。瑠璃釉や銹釉、金銀彩の使用、土型による紗綾形文の陽刻など、盛期の鍋島焼では使用されない成形や装飾の技法が確認できる。試行錯誤の時代であったのである。



②色絵 亀甲椿文皿

鍋島 江戸時代（17世紀後半）口径 19.9cm

輦轤成形による皿。丁寧な裏文様や高い高台にめぐらせる高台文様に鍋島様式（※）の萌芽が認められるが、浅い器形や、裏文様の花唐草文の描き方、高台文様として雷文を採用していることから17世紀後半の前期鍋島と考えられる。緑色で塗る部分を赤色で輪郭を引くのも前期の特徴。

※鍋島様式とは？

鍋島様式とは、17世紀末期から18世紀初頭にかけての盛期の鍋島焼に見られる器形や絵付けなどに関する特徴をまとめたもの。とくに、皿鉢類に顕著です。

- 深い皿に高い高台が付く、木盆形と呼ばれる器形
- 高台に文様をめぐらせる



- 三方に裏文様を入れる

- 色数は青、赤、黄、緑の最大四色



- 輪郭線は基本的には青、赤で塗る部分は赤
- 大きさに規格性が見られる： 尺皿（口径約30cm）、七寸皿（口径約20cm）、五寸皿（口径約15cm）、小皿（口径約11cm）

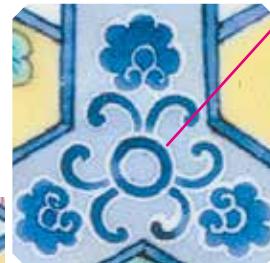
色絵 石楠花文皿

鍋島 江戸時代（17世紀末～18世紀初）口径 20.5cm

いろえ び しゃもんきつこうもんさら
③色絵 麻沙門亀甲文 皿

鍋島 江戸時代（17世紀末～18世紀初） 口径 20.1cm

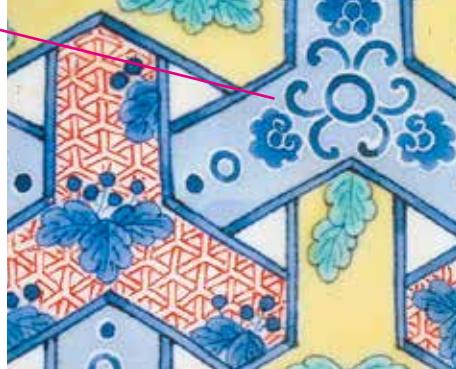
盛期にあたる17世紀末期から18世紀初頭の七寸皿。器形や絵付けに鍋島様式の特徴がよくあらわれている。青地に花文、黄色地に葉文、赤地に桐葉文の3パターンを組み合わせた麻沙門亀甲文を敷き詰め、全体を丸く切り取ったような意匠が面白い。高い技術があればこそ生きるデザイン。



・肥瘦の無い線描



・ムラやはみ出しの無い塗りつぶし



・鍋島焼は1点だけ見ても精巧さがうかがえるが、その真骨頂は組食器としての精度の高さとしてあらわれる。七寸以下の皿鉢類や猪口は数十客ものセットとして製作されたのであるが、どれもほとんど差が無く誇えられている。



・花文の白い線は、「墨弾き」と呼ばれる鍋島焼の得意技法によって表現されている。この技法は、白くしたい部分を墨で線書きしてコーティングしておき、その後青色の絵具を塗って焼くと、墨だけ焼け飛び白抜きになる、というもの。

・強く湾曲した口縁付近でも丁寧に繰り返し文様があらわされている

④染付 牡丹文 皿

鍋島 江戸時代（18世紀中期） 口径 32.6cm

享保11年（1726）以降は、儉約令の影響を受けて色絵を献上することが控えられるようになり、赤のみを使った色絵がわずかに見られる程度になる。その結果、それまでも作られていたのではあるが、鍋島焼の主流は青磁、青磁染付、染付に移っていく。



⑤染付 蝶文 捏花皿

鍋島 江戸時代（19世紀） 口径 21.0cm

安永3年（1774）、10代将軍徳川家治の好みを反映させた鍋島焼の製作が求められた。その中で、角皿や舟形皿など木盆形以外の器形が提示されたことにより、器形のバリエーションが増加していく。轆轤型打ち成形によるものが多い点が前期とは異なる。

※作品①～⑤および展覧会ポスターの写真データ等をご用意しております。ご入用の際は、お手数ですが別紙写真借用申請書をお送りください。また、ご取材も隨時承っております。お気軽にお問合せくださいませ。

展覧会情報

名称：『開館 35 周年記念特別展 鍋島焼—200 年の軌跡—』
会期：2022 年 4 月 1 日（金）～7 月 18 日（月・祝）
会場：戸栗美術館
所在地：東京都渋谷区松濤 1-11-3
開館時間：10:00～17:00（入館受付は 16:30 まで）
※金曜・土曜は 10:00～20:00（入館受付は 19:30 まで）
休館日：月曜・火曜
※5 月 2 日（月）・5 月 3 日（火・祝）・7 月 18 日（月・祝）は開館。
入館料：一般 1,200 円 / 高大生 500 円
※中学生以下は入館料無料。
交通：渋谷駅ハチ公口より徒歩 15 分・地下鉄 A2 出口より徒歩 12 分
京王井の頭線 神泉駅北口より徒歩 10 分
※当館には駐車場はございません。近隣のコインパーキングをご利用ください。
同時開催：『江戸時代の伊万里焼—誕生からの変遷—』（第 3 展示室）
『中島瞳作品展』（やきもの展示室）

本展覧会会期中の催し物のご案内

ラウンジトーク 「鍋島焼入門」

1 階ラウンジにて、スライドや陶片などを使って鍋島焼鑑賞のいろはをご紹介いたします。
入館券をお求めの上、ご自由にご参加ください（予約不要）。

- 6 月 18 日（土）10 時 15 分～（約 45 分）
- 先着 20 名様 ■参加費無料

ラウンジトーク 「『鍋島焼—200 年の軌跡—』 の見どころ」

1 階ラウンジにて、スライドを使って展覧会の見どころをご紹介いたします。入館券をお求めの上、ご自由にご参加ください（予約不要）。

- 5 月 28 日（土）・7 月 6 日（水）各日 10 時 15 分～（約 45 分）
- 各日先着 20 名様 ■参加費無料

ラウンジ & ギャラリートーク 「鍋島焼の歴史と変遷 —技術・技法を中心に—」

前半は 1 階ラウンジにて鍋島焼の歴史や変遷をご紹介し、後半は 2 階展示室にて展覧会の展示解説を行います。

- 6 月 27 日（月）14 時 00 分～（約 120 分）
- 先着 20 名様 ■参加費 1,800 円（税込）（入館券を別途お求めください。）
- ご参加の方には鍋島焼小図録（2022 年 4 月新刊予定）を贈呈いたします。
- 要事前予約

アート&イート 戸栗美術館 × シェ松尾

戸栗美術館にて鍋島焼をご鑑賞いただいた後、シェ・松尾松濤レストランにて佐賀県産の食材を使ったフレンチをご堪能いただけます。

- 4 月 29 日（金・祝）～5 月 3 日（火・祝）、5 日（木・祝）
- 10 時 20 分 戸栗美術館集合

10 時 30 分 作品鑑賞会と学芸員による解説／自由観覧
12 時 00 分 シェ松尾に移動／ランチ

14 時 00 分 解散予定

※現代のやきもの作家・中島瞳氏による角形小皿のお手土産がございます。

- 佐賀県産の食材を使った特別メニューをご提供いたします。
- ※ワンドリンク付（シャンパン又はノンアルコールスパークリング）
- 各日先着 10 名様 ■参加費 17,500 円（税込）
- 要事前予約

次回展予告

開館 35 周年記念特別展 古伊万里西方見聞録展

2022 年 7 月 29 日（金）～11 月 6 日（日）

江戸時代の伊万里焼と世界との関わりに注目し、西欧の王侯貴族に愛された作品を展覧いたします。



色絵 獅子牡丹菊梅文 蓋付壺
伊万里
江戸時代(17世紀末～18世紀前半)
通高 74.6cm

お問い合わせ

公益財団法人 戸栗美術館 広報担当 宛

〒150-0046 東京都渋谷区松濤 1-11-3

TEL : 03-3465-0070 FAX : 03-3467-9813

URL : <http://www.toguri-museum.or.jp/> E-mail : kouhou@toguri-museum.or.jp